

解題

丸山眞男は、一九四四（昭和一九）年に陸軍二等兵として召集されるまで「二年間、江戸時代の政治思想史を講義した」と述べている（『丸山眞男講義録第七冊 日本政治思想史一九六七』東京大学出版会、一九九八年、四頁）。その二度に亘る「戦中講義」が、「昭和一八（一九四三）年度東洋政治思想史」および「昭和一九（一九四四）年度東洋政治思想史」として、それぞれ一九四二年一〇月、一九四三年一〇月に開講されたという変則的な経緯をもつものであったことについては、既稿がある（宮村「丸山眞男の初講義」『UP』第三〇九号、一九九八年七月）。またその講義が、先行また平行して執筆され『国家学会雑誌』に掲載されていた諸論攷（後に『日本政治思想史研究』（東京大学出版会、一九五二年）に収録）および戦後に復員後再開された「東洋政治思想史」講義との間でのどのような関連を持つものであったかについて、『丸山眞男講義録第一冊 日本政治思想史一九四八』（一九九八年）および『丸山眞男講義録第二冊 日本政治思想史一九四九』（一九九九年）の「解題」（以下、「解題一九四八」「解題一九四九」と略記する）で宮村が考察している。それらによれば、丸山の二度に亘

宮村 治雄・山辺 春彦・金子 元・川口 雄一

る戦中講義は、彼の徳川時代史の専論を踏まえながらも独自に構想され、そして戦後の彼の日本政治思想史講義を支える「最古層」をなすものであったといえよう。本編は、丸山の「戦中講義」、とりわけ「初講義」となった一九四三年度講義を主として、その復元・復刻を試みたものである。

復元・復刻は、東京女子大学丸山眞男文庫に収蔵されている「草稿類」で「著作・講義演習・講演」（大項目）「講義・演習」（中項目）「原稿・メモ」（小項目）として分類されている資料の中から、原則として、丸山眞男が、一九四三年度の講義のために準備したと考えられる原稿を特定して「本文」を作成した。原稿の特定に際しては、次の五点を判断の根拠とした。

①戦後講義を復元する際には、聴講した複数の学生の筆記ノートを参照しながら、それらに対応すると見られる講義原稿を特定することができたが、戦中講義については聴講筆記が発見されていない。しかし、文庫所蔵の中に「プラン」と題された二つの断簡草稿がある（資

料番号三四七および三七七八)。合わせると、四葉の松屋製二百字詰原稿用紙に連続して書かれた「初講義」のための全体構想であることが確認できる。その原文は、「解題一九四八」ですでに復元されているが、本編の「本文」を復元する上で最大の拠り所となると考えられるので、ここでも改めて収録した。

「プラン」は、各章・節・項の通し番号とそれぞれのタイトルを記して、そこから丸山の講義の全体構想を推定することができる。またそれぞれのタイトルは、残された原稿用紙群の中から対応部分を探し出す上で有力な手がかりを与えてくれる。とはいえ、それだけでは分散したまま残された原稿用紙群から件の講義原稿を厳密に特定することはできない。

すでに、基本的には「プラン」の構想に沿いながら行われた『講義録一九四八』『講義録一九四九』の復元編集作業に際して、学生聴講ノートも併せて参照することで、戦後講義に加筆をしながらも再使用された古い原稿用紙が確認されている。丸山の「戦後」は、「ひとつは私にあまのじゃく根性から、世の中が一変したからといって、即座に自分の根本の考え方を変えることには反撥がありましたので、意地を張るつもりも正直にいつてありました」というように「戦争中からの道程……を引継いで」始められた（「原型・古層・執拗低音」一九八四年、『丸山眞男集』第一二巻、岩波書店、一九九六年、一一二頁）。講義においてと同様で、実際戦後初期の講義における講義原稿の再使用状況は、そうした彼の「あまのじゃく根性」を映し出しているだろう。そ

れだけに、戦後講義のために用意された原稿用紙と、その中に加筆修正されてまぎれ込んだより古い原稿用紙とを弁別し、戦中講義原稿を特定するには、「プラン」との対応性だけではない基準が必要になる。②その一つは、丸山の原稿におけるかなづかいの変化に見ることができるだろう。

丸山文庫所蔵資料の既発表成稿には、上記原稿用紙の使用状況の場合同時期に、かなづかいの変化が読み取れる。論文では、「陸羯南人と思想」（四七年二月）の草稿（資料番号一八六一二―一、原稿用紙表面を使用）には、旧かなづかいを新かなづかいに訂正した跡が残されている。また、「福澤に於ける「実学」の転回」（四七年三月）の原稿（資料番号六〇四）は旧かなづかい、「福澤論吉の哲学」（四七年九月）の原稿は新かなづかいで書かれている（いずれも裏面を使用）。そして、ここからは、丸山の原稿執筆における旧かなづかいから新かなづかいへの転換が、一九四七年の早い時期までに行われたことが窺える。

また、丸山の自筆書き込みや聴講学生ノートとの対応から執筆時期が確定できる講義原稿についてみても、「昭和一九年一月」の「最終講義における学生を送る言葉」（資料番号八〇）および「昭二〇、一一、一」の日付の「草稿断簡」（『講義録一九四九』口絵写真および「付録一」、資料番号六五九）は、全文旧かなづかい、「昭和二十三年度講義徳川時代思想史 一、開講の辞」と題された原稿（資料番号三五五、三四六、五〇〇―二、五〇〇―三）は、全文新かなづかい、そして一

九四六年度講義の「序説」末尾のマックス・ウェーバーからの引用とコメント（「解題一九四八」二七四―五頁に引用、資料番号三四六）は、新旧かなづかいの混用が確認される。ここから、丸山のかなづかいにおける新旧の転換の時期がさらに絞り込まれ、全文旧かなづかい原稿の大半が戦中講義原稿と特定できることになる。

③このようにして絞り込める講義原稿群からは、丸山が四種類の原稿用紙を用いていたことがわかる。一つは、①で指摘した松屋製二百字詰原稿用紙であり、上記の「プラン」は、これを用いている。今一つは、コクヨ製二百字詰原稿用紙（茶色罫線）であるが、このコクヨ原稿用紙には、罫線の細いものとやや太く濃い色のものの二種類があり、全体として、最も枚数の多いものである。さらに、満寿屋製二百字詰原稿用紙があり、これは上記の「草稿断簡」にも用いられている。これらは、丸山文庫が所蔵する戦中論文に使用されていた原稿用紙ともほぼ対応している。すなわち、「プラン」に使用されている松屋製原稿用紙（黄色罫線）は、丸山の論文「近世儒教の発展における徂徠学の特質並にその国学との関連（四・完）」（四二年八月）の原稿（資料番号六一六一―一）と同じものであり、またコクヨ原稿用紙は、「清原貞雄『日本思想史 近世国民の精神生活』上巻への書評」（四三年六月）の原稿（資料番号六一七一―一）でも用いられている。

ちなみに、丸山が原稿用紙の裏を使って書くことがあったことは比較的知られた事実であるが、丸山文庫所蔵資料に見る限り、戦後になつてからのことだと考えられる。たとえば、一九四六年度講義の第八章

第二節（中期朱子学派の景況・新井白石）は、戦中講義の第二章第三節の一部を再使用しつつ、新たな原稿を加えて成ったものと思われるが、四六年度に付け加えられた第八章第二節の冒頭部分（講義録一九四八」二四二頁五―一一行、収録）は、やや薄いブルーの太字で、コクヨ原稿用紙の裏に書かれている（資料番号三三四）。既使用の原稿用紙紙背を利用して執筆された成稿には、たとえば「西田長寿著『大島貞益』書評」（資料番号九二―一）があるが、そこには戦後の紙不足という事情が反映していると考えられる。丸山の原稿用紙紙背使用は、「必要」の所産であり、そこに特段の「趣味」ないし「思想」を読み取ることはできない、というべきだろう。ここではむしろ、原稿用紙の使用形態からは、草稿における「戦中」と「戦後」の間の弁別のための示唆を読み取ることに止めたい。

④さらに、これらの原稿用紙を使用した原稿類において用いられているインクおよびペンの諸特徴からも、一定の判断基準を抽出できる。松屋製原稿用紙に書かれた原稿類は、「プラン」から始まり、「序説」と思われる三葉および「プラン」で示された思想家の生年と主要著作が書き込まれた江戸時代全体に亘る「別表」一葉（資料番号三四七、本編収録）、さらに「第一章 近世封建制の成立と儒教的世界観の形成 第一節 近世初期に於ける思想界の一般的状況 一、神道」と表記された部分（資料番号三五五）から「三、基督教（切支丹）」の途中まで用いられ、またそれらはすべてブルーブラックのインク・細めのペン先で書かれている。

これに対して、コクヨ原稿用紙で書かれた原稿には、第一章第一節三の途中から以降の大部分、「徳川時代政治思想の一般的性格」の表題で書かれた一連の原稿と「参考文献」一覧（資料番号三七八、三五五、一八二―四一六）、それに戦後講義にも引き継がれた「第一章 近世封建制度の確立と儒教的世界観（近世封建社会概観―江戸時代の社会と意識―）」と題された一連の原稿（資料番号五〇〇―一、五〇五）などが含まれている。そして、これらの原稿群には、薄茶罫線の用紙とやや濃茶罫線の用紙とがあり、このうち薄茶罫線用紙にはすべて細字ブルーブラックで書かれ、濃茶罫線用紙には、細字ブルーブラックと太字ブルーブラックと細字ブラックの三種類の字体のものに別れている。三種類の原稿用紙およびインク字体の混用がないと仮定すれば、これら四種類の態様の原稿には有意味な区別が読み取れるはずである。

まず、「プラン」と同じ松屋製原稿用紙が用いられた部分は、すべて細字ブルーブラックインクで書かれていて、内容上も、「序説」から第一章第一節三（基督教）の途中まで、「プラン」に対応する形で連続しているのと見られる。したがって、この部分は、最も古い原稿、つまり一九四三年度講義のために書かれた原稿として特定できる。こうして特定される丸山の講義原稿からは、初年度においては、「プラン」から「序説」および「別表」、さらに第一章には総論はなく、第一章第一節一（神道）から第一節三の途中まで松屋製原稿用紙で連続して書かれ、その後コクヨ原稿用紙に引き継がれたと見ることができらるだろう。そ

して、「序説」と「第一章」の間の部分は、次年度以降の講義の際に新たに書き足されたものと考えられよう。

次に、コクヨ原稿用紙が用いられている部分についてみると、上記の「序説」および「第一章」の間に差し込まれるようにしてコクヨ原稿用紙で書かれた「徳川時代政治思想の一般的性格」と「第一章 近世封建制度の確立と儒教的世界観（近世封建社会概観―江戸時代の社会と意識―）」総論相当部分には、濃茶箋・太字ブルーブラックインク使用と、濃茶箋・黒字インク使用との二種類が含まれており、また第一章第一節三（基督教）の途中以降に対応する部分には、薄茶箋・細字ブルーブラックインク使用と、濃茶箋・細字ブルーブラックインク使用、濃茶箋・太字ブルーブラックインク使用の三種類の原稿が含まれている。このうち、薄茶箋・細字ブルーブラック使用部分は、形態上からは、松屋製原稿用紙部分に続くと考えられる。実際、この部分への修正・加筆には太字ブルーブラックインクが用いられており、この部分の先行性が確かめられる。したがって、コクヨ原稿用紙が用いられている部分についても、全体として、細字ブルーブラックインク使用部分が最初に書かれたものであり、それに加筆・修正する形で太字ブルーブラックインクを用いた部分が付け加わり、さらに黒字インクを用いた部分が追加された、とみることができらるだろう。

なお、満寿屋製原稿用紙については、上記の「昭二〇、一一、一」の「草稿断簡」の他、『講義録一九四八』に「付録三 結論（年度不明・終章）」として収録した草稿（資料番号四五五―二）が確認される。そ

れらは、「プラン」の上での位置付けを与えられていないところから、戦中講義とは別に、戦後になって新たに執筆されたものと推定される。

⑤そして、こうして特定される戦中講義原稿について、丸山文庫所蔵の講義原稿類全体の中で見直すと、改めて、その多くが戦後講義にも使用されていたことが判明する。たとえば、学生聴講ノートとの突き合わせを通して確定した『講義録一九四八』についてみれば、「第二章 伝統的イデオロギーの諸形態」「第三章 近世儒教の興隆とその社会的基礎」「第四章 初期朱子学者の政治思想」「第五章 朱子学的世界像の分解」「第六章 元禄・享保期の社会と文化」「第八章 石門心学の勃興とその展開」「第九章 近世後半期の社会及び思想の大勢」「第十章 国学思想の発展」「付章一 中期朱子学派の景況」に引き継がれ、筑摩書房箋、岩波書店箋、潮流社箋といった戦後に新たに登場する原稿用紙に書かれた原稿に混じって使用されていることが確認できる。

そのように戦後再使用された原稿をすべて抽出して、改めて「戦中講義」として復元・復刻することは、上記の戦中講義の諸特徴についての判断基準の元に時間と労力を費やせば可能ではあるかもしれない。しかし、新たなパースペクティブの中に活かされたとはいえ、基本的には意図的に戦中の「プラン」に沿って構成された戦後講義録の主要部分としてすでに復元・復刻されている原稿まで、新たに復刻する積極的な意義はないのではないか（上記の対応部分については、「解題」末尾に「一覧」する）、むしろ、戦後講義録の中には断片的にしか

引き継がれていないか、あるいはほとんどそのまま残されている戦中講義原稿だけを、改めて特定し、復刻することの方が有意義ではないか、と考える。そうして、このような部分に相当すると思われる原稿類は、比較的まとまった形で残されているのである。「プラン」に従った項目でいえば、次のようなものがそれに当たる。

- a) (序説)
- b) 第一章 第一節 三、基督教（切支丹）
- c) 第二節 三、熊沢蕃山と貝原益軒
- d) 四、古学派の形成——伊藤仁斎と山鹿素行

それらは、単に形態上、「最古層」の講義原稿の姿を保っているといふだけでなく、内容上も独自の意義を有していると考えられる。

a) は、講義の始めに述べられた簡単な序説に当たる部分と、それを補完する江戸時代全体の年表・思想家入りの「別表」で、講義の際に手元に置いたものとみられよう。

b) は、初期戦後講義の中では、簡略化してしか引き継がれず、五〇年代後半期になって改めて重視されていくテーマである。丸山の日本思想史ヴィジョンには「発展段階」から「文化接触」への視座の転換があると考えがちなが、「基督教」に見られる「文化接触」への関心は、「最古層」というべき最初の戦中講義に於て最も詳細に取りあげられていたという事実は、改めて丸山の日本政治思想史研究の変化へ

の再考を迫る意味があると思われる。

またc) d)については、「解題一九四八」でも指摘しておいたように、もともと「問題史」として執筆され「決して徳川期における網羅的な近代思想発展史を意図していない」という『日本政治思想史研究』所収論文では省略されていた「全体の思想系列の上からは多分に孤立的である様な学者」（近世儒教の発展における徂徠学の特質並にその国学との関連）一九四〇年、『丸山眞男集』第一巻、一九九六年、三〇〇頁）に対する丸山の関心を示すものとして、すでに『講義録一九四八』に収録した新井白石や室鳩巢と並んで重要な意義を持つと考えられる。本編において改めて復元・復刻する所以でもある。

但し、これらの項目に関しては、部分的に重複する二種類の原稿が含まれている。それらは、「戦中二度」の講義の中で書き直されたという経緯を反映していると思われる。また上記に指摘した使用されている原稿用紙およびペン字体の相違から、それらの先後関係は特定できる。したがって、本編では、一九四三年度講義原稿として特定できるものを「本文」とし、他の原稿を「注」として再録することにした。このほかに、一九四四年度講義のための講義原稿として特定できるものなかで、次の二つを「本文」として復刻することにした。

e) 序論追加部分（「徳川時代政治思想の一般的性格」および「参考文献」）

f) 「昭和（十八）（九）十八年度最終講義（昭19・1）における学生

を送る言葉」

e)は、「プラン」第一章末尾余白に書き込まれた「次年度への注意」に対応して書き下ろされた部分と見られ、一九四三年度講義原稿の序論の後に続いて講じられたものと考えられる。

f)は、上記の各種講義原稿とは全く異質なものである。これまで紹介してきた講義原稿は、丸山文庫に所蔵される「著作・講義演習・講演」―「講義・演習」―「原稿、メモ」項目の中から、すでに述べた「判断基準」に従って抽出・整理されたものであるが、この原稿は、丸山の自筆で表題が書き込まれた「東京大学法学部」と印刷された封筒に収められている。つまり、丸山自身が明示的に取り置いた原稿である。袋表面の表題がいつ書かれたものかは特定できないが、内容は、最終年次学生に対する丸山の「送る言葉」である。理解の上で、最低限必要と思われる事実について、一部「丸山眞男の初講義（前掲）」と重複するが、ここに補足しておく。

戦中の東京帝国大学の学年暦は、戦況の悪化に伴って、大きく変更された。まず一九四一年一〇月一六日に、勅令第九百二十四号「大学学部等ノ在学年限又ハ修業年限ノ臨時短縮ニ関スル件」およびその関連法令の公布に続いて、東大では同年一月「東京帝国大学学年暦臨時措置方」が評議会で決定された。それによって、一九四一年度は三月繰り上げられて、一二月卒業、翌年度からは半年繰り上げで九月卒業とされた（東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』通史一、

東京大学出版会、一九八五年、六四三―五頁）。そしてこの措置に対応して、一九四二年八月に「新学年暦」が定められ、新たに一〇月から翌年九月を「学年」とされることが定められた。つまり、「一九四三年度」は、一九四二年一〇月から始まることになったわけである。この措置は、以後も継続されることとされ、年次学生毎にねじれた複雑な「学年学期」区分が実施されていくことになる。その経緯については、「昭和十七年十月九日 修業年限短縮に関する対策に付き」と題する評議会決定、および「在学修業年限短縮表」（いずれも、東京大学史料室編『東京大学の学徒動員・学徒出陣』東京大学出版会、一九九八年、所収）が明らかにしている。また、各学年内での「学期」区分については、「紀元節を境目として区分することに取決め」（『東京大学百年史』部局史一、一九八六年、二四二頁）たということなので、それらに従えば、「第三学年選択科目」つまり最終年次学生を対象とし前学期に指定されていた「東洋政治思想史」は、その「昭和一八年度講義」が、一九四二（昭和一七）年一〇月から一九四三（昭和一八）年二月までの学期に、さらにその「昭和一九年度講義」が、一九四三（昭和一八）年一〇月から一九四四（昭和一九）年二月までの学期に、それぞれ行われたことになる。

この間、一九四三（昭和一八）年九月二二日に戦時国内態勢強化の根本方針が閣議決定され、それを受けた「在学徴集延期臨時特例」による文系学生の徴集延期停止に伴ういわゆる最初の「学徒出陣」が同年一二月一日に決行された。東大法学部でも、「（徴兵）適齢に達しな

い二割弱の者を除いて、十月二十五日から十一月五日の間に徴兵検査を受け、十二月一日に入営することになった」（『東京大学百年史』部局史一、二四五頁）。このとき何名が入営・入団したかは明らかにされていないが、明年九月の次年度卒業生が、出陣中の三六〇名を含め五七名であった（同上、二四八頁）ことから逆算すれば、第一次の学徒出陣（さらには四三年一二月の勅令「徴兵適齢臨時特例」による徴兵年齢の一九歳迄の引き下げ）を超えて在学していた者が、少なくとも一五七名いたことになる（四三年九月の入学生は除く）。

以上のことを前提とすれば、丸山が「学徒出陣」を想定して行い得た講義は、「昭和一九年度講義」だけということになり、「昭和一九年一月」に「最終講義で卒業生を送る言葉」として述べたのは、この年度の最終講義でのことであつたと特定できる。「年度」についての丸山の書き消しが示す記憶の混乱には、講義年度の変則性が刻まれており、またそれは逆に「日付」についての記憶の正確性を示していると考えられよう。在学学生のうち何名が丸山の講義を受講したかはわからないが、聴講した第三年次学生を含む在学学生全員は、三月一日から「緊急学徒動員方策要綱」にしたがつて各地での土木作業に従事していった。そして、助教授丸山眞男自身が「二等兵教育召集」により松本市の歩兵第五〇連隊補充隊に応召したのは、七月一日のことであつた（以上、『東京大学百年史』部局史一、二四七―八頁参照）。丸山は、後に「『日本政治思想史研究』あとがき」（一九五二年）で、次のように述べている。

……本書の第三章「国民主義の「前期的」形成」は前述のように私の応召直前の労作であり、とくにその後半部は、召集令状を受けてからなお一週間の余裕があったので、出発のその日の朝までかかってやっと纏め上げ、新宿駅で見送りに来てくれた同僚の辻清明君に手渡したという曰く付のものであるだけに、その出来・不出来はともかくとして一しお想い出が深い。机に向って最後の仕上げを急いでいる窓の向うには国旗をもつて続々集って来る隣組や町会の人々に亡母と妻が赤飯の握りを作ってもてなしている光景は今でも髣髴として浮んでくる。（『丸山眞男集』第五巻、一九九五年、二九三頁）

また、この年度の講義に関して、丸山自身、次のように語っている。講義というのは、……いかに助手の時代に徳川時代をやったといっても、助手論文を書くのに懸命だから、たとえば熊沢蕃山とか、論文の主題からはずれる系列は出てこないのです。そういうのを一生懸命勉強したのは講義のためです。仁斎や徂徠は前からやっている。林羅山も前からやっているでしょう。抜けているところ、大きいのは熊沢蕃山、新井白石、室鳩巢というところですね。これは講義の準備のために、一生懸命勉強しました。

昨日ちょっと、そのときの原稿の断片を見ていたら、昭和一八年の最終講義で終講の辞みたいなのを述べたのが、そこだけ出てきました。吉田松陰が久坂玄瑞なんかを叱って、悲憤慷慨を戒めているところがあるのです。それを引いて、時局に対して慷慨す

るのが諸君の仕事ではない。国家が君たちを要求したら、そのときは潔くペンを剣にかえよ。その日まではペンを捨ててはいけません。そういうようなことを最後に言ったら、学生から非常に感激したという手紙が来ました。それを覚えています。（松沢弘陽・植手通有編『丸山眞男回顧談』下、岩波書店、二〇〇六年、二〇五頁）

なお、文中引用の文章は、吉田松陰が安政元（一八五四）年黒船密航企図事件で入獄した萩野山獄で認めた漢文稿の一つ「丙辰幽室文稿」（安政三年）にある「久坂（玄瑞）生の文を評す」からのものである。

丸山眞男戦中「東洋政治思想史」講義原稿再使用一覧
 (『丸山眞男講義録』第一冊収録分に限る)

初出		再使用先	
1943年度	1944年度	1946年度	1948年度
	第1章〔総論〕		第1章第1節
第1章第1節1			第2章第1節
第1章第1節2			第2章第2節
第1章第1節3			第2章第3節
第1章第2節1			第3章第1・3節
第1章第2節2			第4章序説・第2～3節
	第1章第2節3〔総論〕		第5章第1節
第1章第2節3a			第5章第2節
第2章第1節			第6章
第2章第3節1		第8章第1節	
第2章第3節2		第8章第2節	
第2章第3節3		第8章第3節	
第2章第4節			第8章
第3章第2節			第9章第2節
第3章第3節			第10章